# マスクがもたらす未来（２０２１・５・２８）

インターネット普及の初期に北欧の通信会社が高速回線を宣伝した面白い広告があった。男性が女性に自分の画像を送信するが、低速のため時間がかかり、頭部から目元まで表示された段階で女性が好意をもち交際を了承する。ところが次第に口元まで表示されたところ醜男ということが判明し、高速回線が重要だということを宣伝する内容であった。

ある研究で人間が顔面の写真を凝視するとき、視線が移動する箇所を調査したところ、両目と口元が大半であることが判明した。また特定の人間を見分けるとき、両目だけや口元だけの写真より、顔面の右側か左側の半分だけの写真、すなわち目元と口元のある写真のほうが正確に識別できるという結果も報告されている。

生物学者チャールズ・ダーウィンは『人間と動物における情動表出』という書物で、感情の表出は人間が進化の過程で獲得した特性で、世界各地の民族は目元や口元を変化させて感情を表現する習性があることを報告している。これは人間の意思疎通が言葉を獲得する以前には目元と口元を重視していたことを示唆している。

この特徴は民族の伝統ある文化にも反映している。日本の能楽が好例であるが、歴史のある祭事や芸能では主役の人物が化粧をし仮面を装着して、日常生活で感情を表現する目元や口元を隠蔽することが一般である。それは日常とは別種の精神が憑依して、普段の人間とは相違する状態になることを表明する仕掛である。

一般社会でも強盗を実行する人間はサングラスで目元を、マスクで口元を隠蔽するのが普通であるし、中世や近世のパーティでも高貴な人々は仮装し仮面を装着して身許を隠蔽していた。これらの事例を要約すれば、個人の識別には目元や口元が有力な標識になり、それを回避するために仮面や化粧が利用されてきたことになる。

コロナウイルスが浸透した現在の社会では、大半の人々がマスクを着用していて口元の動作は確認できない。発言の微妙な意図は言葉だけではなく、眼球の動作や口角の変化なども参考にして判断しているとすれば、その半分がマスクで隠蔽されるようになっている最近の会話では判断の材料が半減していることになる。

マスクとともにコロナウイルスの蔓延で一気に普及したのがテレワークである。これは通勤地獄からの解放や家族との共有時間の増加などの利点がある一方、直接面談する場合に比較すれば交換される情報は大幅に減少している。多数の人間が参加する会議でも別々の場所から参加している人々が一体を実感するのは困難である。

情報と情緒という類似の言葉がある。確定した定義はないが、前者は明確な論理のみを伝達する内容で少数が所有するほど価値があり、後者は曖昧な気分も伝達する内容で多数が共有するほど価値があると定義してみる。マスクを着用しない人間が直接面談する情報交換は情報とともに情緒も付加して交換する行動である。

これまで人間社会に襲来したパンデミックは既存の社会秩序を変革してきた。中世のペストはキリスト教会の権威失墜、貨幣経済の進展、貴族社会の崩壊などを発生させ、近世への移行を加速させたが、マスクとテレワークによって情緒の欠如した情報交換が主流となる今回のパンデミックがどのような社会を実現させるかは真剣に検討する価値のある課題である。